

色を見せない黒煙で縫綴されて置き、西洋千輪の輪分位づつを、ボカリ／＼と間を置いては吹き出させるのである。巧みな手さばきで、マジック師が黒い幕の前でランプ札を扇型に何回となく開かせてはシルクハットの中へ捨て去るような、花火の中の手品師で、もう、いくらなんでもおしまいだろうと思つて次の番附に目をやると、はるか風下の、松林の上へ行つて又ボカリ出るので、コレハ、コレハである。

次に、水中玉吹龍というのがあった。これは前の曲集火の火色を伏字の黒煙で色彩のサイレントで持つて行くところを反対に積極的に空中で小さい三国を噴射させて、リュウ／＼と、くねらせれば、いかにも龍が遊泳してゐるように見えるのである。そして時々先の曲集火を配するワケである。同巧異曲で玉追ひ龍というのもあった玉の内径一パイの小筒五、六本を束ねて、これに龍の主体となるべきもの、曲集火となるべきものを適当に詰め込み、一本が終るとミチで次の筒に火は誘導されるからいかにも、龍はこのとき二直角方向転換をしたように躍動を覚える。三段式ロケットではない五、六本に及ぶのを懇切丁寧にしてゐるから見たえがあるはずである。

次に、銅の織織というのがあった。もちろん曲もの王たるものであるから、「長玉」でわざと軽小筒（といつても長玉の内におさまる程度）の末端子にダケ赤、青、黄、緑、白等いわる銅とな

るべき火色の葉を底部に片寄せて押し詰め、わざと不安定なフランフランと片かしぎのする状態にし、この小筒の空洞の部分には厚手なカップの小旗をくつつける。これがサク裂によるショックが、銘々の小筒にそれぞれに変則に不安定に伝わって、かてて風切りの小旗が加速度にそのフランフランを拡大して、放逸、不規則な動きをはじめる。すなわち「綾織り」がはじまるのである。長玉の内臓物を攪乱させないためには打上げ火薬をほとんど半減して打上げる上に、球体と異り、弾道が未段に乱れるので普通ののろしの半分位の中空から織りはじめるので、境内の松の枝にからむまで織り降るのである。またそんな調子でないと上首尾ではないのである。これを中途から小旗のフランフランによらしめないで、向かい合った小筒同志の軽微な分随にして、ブリュブリュブリュツと、スピーディーにやつつけはじめるようになってから、「銅の綾織り」という悠長サから乱玉（らんぎよく）というようになった。名は應をあらわす、綾織の方がどんなによかつたかわからない。|| 続く || (筆者 飯田市今宮町)

郡史纂り受けたし 下伊那史第二巻二千円位、第三巻三千円位でお譲り下さる方がありましたら史学会まで御連絡下さい、人さまのものお世話下さるも結構であります。

(姓名在社)

大正の飯田風物詩

杉 本

謙

情緒の町飯田

「遊ぶなら飯田だ」ということは昔から云われたものだ。夜のざわめきがいづ果てることもなく続くのが飯田だと言われた。あの情緒と人情が大火で消えてしまったとも考えられん。松本にも長野にもない、江戸や大阪にも恐ろしくない飯田でだけ味わえる遊蕩の面白さがあの伊那谷に育つたのは何より温和な気候と養蚕景気と物産のおかげであらうけれど、そこに育まれた人情の綾織とが飯田情緒をつくり出したので江戸の芝居が信州で真先にくるのは飯田だった。

(伊那四六)号第一四巻第九号飯田歌舞伎座主下平伊吉のこと水野都生氏)を見れば明治大正期の飯田人が如何に歌舞伎芝居が好きであったかが実に詳細に書かれて居る。大正期に飯田の電話は夜間の使用回数が多いのでは信州第一だったそうで松尾町の郵便局へ見学に行つた時に局員からそういう話を聞いて笑つたことがある。夜間

活動がそれだけ活発だということだからあの方も信州屈指の部類に属したのであらう。その点飯田人も人後に落ちないと思はれればこれ又結構な話である。

その頃の呉服屋

私はこの間兄の娘が嫁にゆくというので結婚式が名古屋の駅前のホテルニューナゴヤの八階で行われ、その時間司から来た妹操子と私は久しぶりに紋付を着て出席した土蔵から出して来た紋付、と仙台平の袴の包み紙が今から四十年前も前の井上呉服店の包装紙だったので昔なつかしさにハサミで切り抜いて井上呉服店電話百三十番と記しある紙片をメモ帳に張りつけた。勿論あの店も飯田の町から消えてしまつて今はない私の子供の時分井上呉服店の番頭が紺の太いきふろしきに呉服類をかついで私の家へ廻つてくる座敷で茶菓子を出して母が姉や妹を相手にあれこれと呉服を注文して居たものだ。昔は呉服屋は得意先を番頭や年

輩の小僧さんが廻つて来たもので近頃デパートなどでわざわざ座売りコーナーなどというものを作つて昔なつかしい座売りを再現して客を呼んでいるが大正期の中頃までそういうことが飯田でも續いて居た。私のうちに居た手伝ひのおばあさんも芝居好きの飯田っ子で、

「芝居が好きで、染みで今夜は芝居に行く」というと朝のうちから、おすしや卵焼、里芋やごぼうの煮付まで重箱に用意して行つたもので、芝居が長くなると、うちへ帰つて食べものをこしらえてまた行つたものだ」と言つて居た。ある時はじめて飯田へ来た歌舞伎役者が紐結びの足袋を見付からず、

「ほんとはコハゼの足袋ぢあけいねえんだけど。」とあり合せのコハゼの足袋で舞台へ出たら、「あんな足袋で歌舞伎はやるもんぢあねえ。紐結びの足袋と昔からきまつたもんだ。あれぢあどうせロクな役者ぢあない」と酷評を受けたそう。その話をあとになつて耳にした当の役者は赤面しながら、楽屋裏で、「飯田の見物人は目が高い田舎だからと馬鹿にあてきねえ」と言つたそうである。

畳敷いた座席

私が松本に居た時分、時たま春三月の休みの晩に飯田へ帰つてゆくと、その日松本は肌をさすカラ風と小雪が吹いて総毛立つような寒い日だったのに飯田では生暖い雨が降って居て、久しぶりに故郷の家の便所などに入っていると遠くから三昧線の音が聞こえたりした。明るく笑っている人声などと一緒に、そのようなざんざんめきの音を耳にするとあゝやっぱり飯田は松本や長野などと違うな、どこかつやつやとした楽しみがたよって居る、と思つたものだ。

先に若松座のことを書いたけれど大正期には若松座、曙座、末広座が劇場で座席は疊敷で柵目にしきられ火鉢茶、ふとん炬燵、まで取り寄せて、(それ等の代価が幾らであつたか。詳細な記録が現在残っているかどうか知らない) こうして活動写真や芝居見物をしたので今から考えと立ち振る舞ひにほこりやちりが上ったり、小使臭い臭ひが人いされに混って場内はふんとした異様な臭気であつたかと思ふ。五月信子が電氣館に来た時にはケガ人が出るという騒ぎだつた。飯田の今の映画館はどのようなものであるか知るよしもないけれど昭和三十六年の夏、久しぶりに飯田に帰った時音の曙座の近くに映画館があつてときついギヤング物だかの映画らしく横文字の並んだ下に唇の真赤な金髪女の顔などが描かれたポスターが出て居た。勿論中は椅子式だと思ふけれど映画館が椅子席になつたのはそう古いことではない。

子、岩田祐吉、次にあの坂妻時代になるのだがあちらものではお馴染エルモ・リンカン、ワイリアム・エスハート。ついにヴェンチノの美男に泣きくすれるという有様。ジョン・ペリモアなどが出てくるのはそれから少し後のような気がする。五月信子が電氣館に来た時にはケガ人が出るという騒ぎだつた。飯田の今の映画館はどのようなものであるか知るよしもないけれど昭和三十六年の夏、久しぶりに飯田に帰った時音の曙座の近くに映画館があつてときついギヤング物だかの映画らしく横文字の並んだ下に唇の真赤な金髪女の顔などが描かれたポスターが出て居た。勿論中は椅子式だと思ふけれど映画館が椅子席になつたのはそう古いことではない。

松本の西洋料理

銀座会館がそれなのかもしれないけれど主税町の中ほどに昔は松本というカフェがあつて私もときどき松本のカツレツをよるこんで食べた。大正七八年頃に正木ひろし(在東京、弁護士)という若い先生が飯田中学(現飯田高校)に居て先生につれたつて松本へ行ってトンカツを食べたことを今でも覚えてゐる。正木ひろし先生が描い

供の頃母につられて若松座へ行つたことを思い出すと案になつたらしいのである。

活動写真の盛り

活動写真の盛りにはそは屋に上つて暖かいそばを食べるのがまたうれいもので荒町に花の湯という銭湯があつて(今の中央通り一丁目)その隣りにそは屋があつた。そこまでくると自分の家に来たも同じようなものだったので、まあそばでも食べようということになるのである。花の湯には一三ちゃんという私と小学校同級の仲のよい女の子が居た。そは屋の二階は六畳から四畳半位の小部屋にきつてあつて炬燵でころりと長くなくて足腰のばしてそばの出來てくるのを待つて居るのはなかなかいいものだった。私は今でも思ひ出の映画で打入りの晩のそは屋の二階の場面を見ると荒町のあのそは屋の光景を一時思ひ出すのである。あゝ、いう店構は行儀も自然に悪くなり、涙は複雑なことも起つたりしたかもしれないが今思へばもう一度あんな調子にそばでも食べたい、芝居でも見たらどんなに氣も安まり楽しんだか解らないと思うんだ。もう昔をなつかしがる気持ばかりが先立つて、その時の不都合や不便さなど忘れ

てしまつて一枚一枚幻のように美しい画となつて目に浮ぶのである。活動小屋の入口で金を払うと入場券がわりに木札をもらつて、それを戸口の番人に渡し、下足を預けて、下足札を受取つて入つてゆくと座ぶとんや火鉢を用意して立つて居る女達が一世いに、

「いらつしやいませ。座ぶとん如何です。」と言つた調子で一人一人の客の世話をするのである。入場の木札に何と書いてあつたのか。手垢で黒光りになつた居たその木札は私にはひどく値うちのあるものに見えた。荒町に電氣館が出来たのは大正十年頃だつたらうか。電氣館ではもう一幕一幕でパツと明りがついて二巻目三巻目などというようなことはなくなつた連続映写で映写幕のある舞台の前にボックスという楽師の居る穴みたいな席があつて時代劇の追跡の場面などになるとチャツ、チャツ、チャツ、チャツ、チャツ、チャツと音楽の伴奏をやるのでその伴奏の音が私の家の庭まで聞えて来た。活弁華かなりし時代で世は華けて、「龍の島」と「枯れすすき」、流れ流れて落ちゆく先は北はシベリア南はジャワよ。とはかり唄いあげ諸口十九、栗島すみ

たパステルの森の絵がかかつて居る壁の下であつた。当時トンカツはどうまいものはこの世にないと思つておつた私は松高でビールを飲んでトンカツを食つたら最高の榮華だつた。「酒は涙かためいきか」子供のよどがけみたいなエプロンをした女給共。あの頃のカフェエの女給の化粧は目の下からほほまで桜色にぼつと薄赤く塗るのであつて夕方になるとそうした化粧をした女給達が店の前に立つて客を待つて居る。夏は打水を道路にするのでぶ臭い下水のほいがふんと流れて来る。

「私しや夜に咲く酒場の花よ」なんて唄がレコードに唄つて店の中から流れて来てユズのような赤黄ない電燈がつきはじめると飯田の夜がはじまるのだつた。アツパツパる称する下着一枚であつちこち出歩く女達向うの広小路に夜店がつづき、目を射すようなアセチレンの臭気。氷水をかく水の音、下駄の音、大正期の広小路の夜はおそくまで続いたものだ。今は早く店を閉めてしまふ家が多いけれど大正時代の店屋は十時頃まで店を開いた居る家が多かつた。今のようにながらなかつた。大正期では夜店を閉めるには大戸をおろすので大戸の

間に小さい出入口の戸障子を立てる頃は夜も更けてからである。

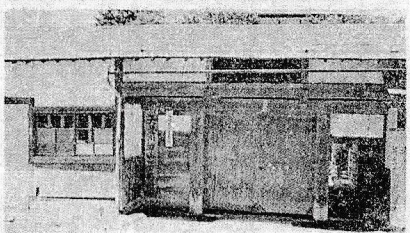
大火前の飯田

大火前の飯田の旧体を保つて居るのは仲の町、江戸町の下あたり、長徳神社、飯田城跡、三宜亭の一角であらう。追手町も小学校から下の部分が残つて赤門は昔のままである。三宜社の庭から伊那山脈を一望にするあの景観は実にいい。夏雲のわき上る伊那山脈の山なみ。秋になると紫色にかすみはじめる伊那山脈のあちこちから上る炭焼の煙。私はあの三宜亭の商合の架端の伊那の山河を一望にする景勝の地に一屋を得たい願望を長く幻にえがいて居たが昭和四十二年の秋三宜亭の客になつた時座敷から見たらあの尖端には小さい家がぎつしりつまつて居た。

春草の生誕の地が仲の町だということは案外知られて居なかつた。柏心寺に墓があるというのも筆者も最近まで知らなかつた。春草の兄である幾田為吉は、かつて私の生家の別宅が長久寺のそばにあつた頃、大正四、五年の話だから五十年前のことだが私の隣りに住んで居た。為さんは飯田中学の数学の先生だつた。学校は物理学校

を出たのだという母の話を覚えている。
「為さんは秀才だ。」というのが母の口グセだったから春草も才智察にすぐれた人であつたことは言うまでもない。長久寺の境内が私達子供の遊び場所だった。一度首つ

写真小話 ⑬ 二ノ丸御門



これは旧飯田藩馬場調練所(馬場町)に在った門である。明治二年二月、調練所修理の折、旧御城内二ノ丸地蔵の下屋敷門として移築したもので、幕末には奥の御殿にお

りが鐘つき堂で死んで居て、老人の首つりを発見した私達は坊さんにいち早くそれを知らせ、それから巡査が来たり、見物人が本堂の前の庭に集ったりして大さわぎをしたことがあつた。山門のそばの庭にはイチ

姫様がいたと伝えられている。また殿様の御蔵もあつたが取り壊したり、地方事務所の独身寮に改造したりして昔の面影はない。

昭和の初期までは、門を挟んで両側に白壁、武者窓、腰板塀が棟を統べていて武家長屋の風姿を残していた。

板倉だった屋根がトタン葺になったのは大正八年頃だった。それから後も、しばらくの間「お堀籠」が門の天井の梁木の上に置かれていたのだが今は無い。

移築後ちょうど百年経つ今では、荒れるに任せ修理の手も加えられない、県のものでなく市のものでもなく協同社では所有地の地上にあるから社のものだといふらしいが、修復する気もないようだ昔は蚕種同業組合、今飯田教育事務所がこの奥にある。(水野都生)

イの太木があつて、夏になると赤い実をつけた。
あのイチイのまわりが私たちの鬼ごっこをする場所だった。裏山の墓地へ行く石段に足袋石という足袋の形をした石が中程の登つて行つて右側にあつて、それを踏むと罰があたるといふので子供心にもその石は踏まないようによけて歩いた。何かの拍子でその石を踏んだりすると子供どうして、「やあ、足袋石を踏んだ、踏んだ。」と言つておそろしがつた。夏は石段の中途の不動様の龍に打たれた。あの龍は上とその水がもう一度落ちて下の龍になるので二つあつたけれど下の龍は石ころが出て居てあぶないので子供は入らなかつた。時々ま行者のような人が白布をまといながら下の龍に打たれて居てそのような光景は子供心にも凄いのであつた。
(金沢市南森町七の七六)

忘れもの 去る九月廿八日上吹郷十連礼の際小沼の観音堂へメガネを置き忘れた方があり本会で保存しています

本の紹介

郷土に關する
すゝめたい郷土資料



平沢清人著 ☆下伊那地方の 中世末より 近世への推移

簡井泰蔵

今度平沢清人さんが書かれたこの著作は封建社会の構造変化を知るのに最も適切な教科書といえます。人も知るように平沢さんは近世史については中央・地方を通じての第一人者の存在ですが、またどの時代についても広い教養と史眼を持った方です。そして平沢さんの書かれるものの特徴は具体的な資料を豊かに使いながら、よく消化されて平容な文体でわかりやすく述べておられることです。

私は嘗て中世社に興味を持って、その基礎としての社会構造を納得のいくようにつかみたいと思ひ、中央の学者が書いている著書・論文を相当多くあさつたことがあります。最後の一つがどうにもはっきりしなくてもどかしい思いがしました。そんな時平沢さんの書かれた「近世村落構

造の研究」その他の著書や雑誌の論文が、それをすつきりと教へ説いてくれたのをいく度か経験しています。それはまさに「蘭靴撞撃」から直接肌をかいでもらう快さに似たものがありました。

今度それらの旧著論文を整理され、新しい見解も加えてその粹を一冊にまとめたのださつたことは、歴史を学ぶ者にとつて誠にうれしいことです。書名は「下伊那地方の中世末より近世への推移」となつていますが、これはひとり下伊那地方の歴史説明だけでなく、広くわが国全体の同時代の姿を知るによい頼りになります。

われわれ伊那地方人土にとつては、これまで露の中に置かれていたようにぼんやりしていた時代相が、身近かな村落社会の資料によつて根底からはつきり指示されて、目からうろこが落ちたように感じられる方が多いと思ひます。

本書はA5型二〇〇ページですが、巻末の著作目録の部を除くと本文は一六二ページの手ごろな量です。五章から成る内容の中心は第二章以下ですが、序論的な意味で書かれた「第一章支配関係の推移」も、これまで不明確であつた細かな点にまで検証

の手が加えられていて、新しく教えられるものがあります。「信濃資料」その他、市村先生による通史以後の諸論考や資料をとりあげながら、すつきりと読ませてくれます。

第二章、貫文制より石高制への移行、「第三章中世末の知行地と百姓地」「第四章村落内の近世の機構編成は秀吉の検地から始まつた」「第五章中世末より近世への村落居住民構成の推移」は先に述べたように本書の中心内容で、ごく普通の村落社会が中世から近世へと激しく動いていく封建社会の一つの変貌期に、どのような社会構造的变化をとげていくか、そのようすを庶民的な感覚から克明に知らせてくれます。

平沢さんの生家に保存されていた「平沢文書」を中心に、伊那地方に残存しているその頃の古文書を多年渉猟研究され、全国的な視野に立つて整理された成果が、少しも肩を張らぬ親しみやすい文章で、要を得た資料配置とともに展開されています。

いわゆる学者が、その独特な固い論文形式で書いたならば、相当覚悟してかかっても頭がいたくなつて、とても一日や二日では読めぬような高度の内容(42頁へ続く)